

学長選考・監察会議議事録
(令和4年度 第6回)

令和4年11月28日(月)
14時40分から16時10分まで
法人本部3階「第一会議室」

【出席者】

経営協議会選出委員

相澤 益男 伊藤真知子 小林 裕明 里村 正治 長谷川眞理子
鈴木 道子 西海 和久

教育研究評議会選出委員

是川 晴彦 中西 正樹 並河 英紀 上野 義之 佐藤 慎哉
黒田 充紀 村山 秀樹

【陪席者】 渡辺監事 大森監事 羽鳥副学長

議事に先立ち、羽鳥副学長から、本日の会議が規程第5条第2項に定める会議開催要件を満たしている旨の報告があった。

I 学長の業務執行状況に係る中間評価について

(1) 学長ヒアリング

相澤議長から、本日は、参考資料1「学長の業務執行状況の中間評価に係る実施計画」(令和4年10月19日学長選考・監察会議決定)に基づき、学長からのヒアリングを行う旨説明があった。

次いで、玉手学長から、資料1に基づき、学長就任以降の業務実績に関する自己評価について説明があった後、玉手学長と学長選考・監察会議委員との間で次のとおり質疑応答・意見交換を行った。

委員からの質問・意見等の要点は、以下のとおり。

- 15ページの「教員一人当たりの研究業績」について、総合文系(人文社会科学部、社会文化システム研究科)の数値が他の学系に比べて非常に低いのは何か理由があるか。また、37ページの「⑨常勤教員当たりの研究業績数の伸び率」について、他の大学と比較すると最下位に近いが、どこに問題があると把握しているか。(西海委員)
- そもそも本学の教育は基盤共通教育と学部教育をともに作り上げていくという共創的關係があったが、令和5年の新しい基盤教育を開始するに当たっては、基盤共通教育の改革を先にし、そのあおりを受ける形でCP・DPに手を入れざるを得ないくらい学部教育を変えざるを得なかった。大学の教育改革を考えると、基盤共通教育だけを考える、あるいは学部教育だけを考えるという進め方についていかがお考えか。(並河委員)

- コンプライアンスとかリスクマネジメントとか、ガバナンス体制の強化みたいなものも含めて、CSR 経営の領域に対しての認識が甘い。ずっと山形大学の足を引っ張っている、いろんなコンプライアンス関係の問題に対して、学長としてもっと手応え感のある結果に結びつくようなアクションが、これから次の3年に向けて非常に重要になってくる。ポジティブなアクティビティはどんどん進められていて、これから成果に繋がっていくと思うが、足元のところが心配。その辺についてはどうお考えか。（西海委員）
- 40 ページで、文理横断型教育プログラムについては学長の自己評価が▲となっている。これは後半の3年間で力を入れていくということか。そのことと学部の教育改革というのは同じことを言っているのか。それから、新基盤共通教育と学部教育改革の中身について、いただける範囲で結構なので、後で資料を送って勉強させていただきたい。もう少し端的に言うと、文理横断型教育プログラムという言葉がどうしてこの重点事項に載っていないのかという疑問がある。また、これは小白川キャンパスだけのことですか。（里村委員）
- 入口管理から出口管理へという学生の教育の大きな根本変革を考えられているが、どうして重点事項に載せていないのか。（里村委員）
- 教育研究はいろんな工夫をしながらレベルアップしようという学長の方向性も見えるが、地方大学として学生をいかに確保するかというところが非常に大事だと思っていて、どのような工夫を考えているのか伺いたい。現状をどのように考えていて、将来をどのように考えているのか伺いたい。（村山委員）
- 研究力を強化していくということも大事だし、いろいろ下がったレベルの対応となると、学生のケアというのも今まで以上に求められる部分もある。そして社会連携もしていかなきゃいけない。そうすると、どの教員も全ての要素について全部頑張れ頑張れということなのかもしれませんが、それぞれ得意としているところもあるし、研究分野によっては社会連携がしやすい分野とそうでない分野がある。新しい組織を使えば、そこを回すのに力を注がなければいけない教員も出てくる。そうすると、研究とか教育とか地域連携とか組織運営とか、そういったところのエフォートの配分というのは臨機応変にやっていかないと回っていかないとところもある。その辺についてはどのようにお考えか。（是川委員）
- リスクマネジメントの全学的な体制が整備されつつあり、大変助かっている。一方で、いくら体制が整備されて書類を先生方から提出してもらった仕組みができたとしても、チェックするのがそういった業務経験のない教員になる。そうすると、どこかで漏れが発生しかねない。ですので、戦略人事の考え方について、以前もお伝えしたかもしれませんが、放っとけば部局が手を挙げるであろう人事に戦略人事を使うのではなく、コンプライアンスとか入試とか学部が手を挙げないところに戦略人事を使うなど、もう少し経営的な視点での戦略人事と教学的な視点での計画人事を色分けしてもいいのかなというのが私の意見。そのあたりいかがお考えか。（並河委員）
- 社会共創のところで、国内でも珍しいプラットフォームが立ち上がってこれから進めていくと思われるが、非常に大きな目標と組織の割に学内の体制がそこまで整っていないのではないのかなというのを少し懸念している。今後その体制はどのようにお考えか。（並河委員）
- 文理横断型教育プログラムが現時点でなかなか進んでいないというようなことをおっしゃ

っていましたが、5ページを見ると、「文理融合教育」という言葉と「文理横断型教育」という言葉を両方使っている。似ている言葉ですが、使い分けているならどのように使い分けているかについて伺いたいというのが一点。それから、キャンパス横断型という言葉も使っていて、それは非常に重要だと思うが、各キャンパスが別々ではなく協力して、それは研究も同じことだと思うので、例えば、これからの新しい研究ということでウェルビーイング研究所を立ち上げられるけれども、それがいわゆるフィジカルな健康だけではなくて、社会的な意味とか少子高齢化とかというような、社会科学的なまさに文理融合でしようかね、インターディシプリンとかクロスディシプリンとかよくわからないのですが、そこをどのようにお考えかというのを伺いたい。（伊藤委員）

○社会共創プラットフォーム事業の実施は、とてつもなく大きくて難しい。素晴らしいビジョンと理解しているが、結果を出せるかなという不安もある。先日たまたま、仙道学長時代の分散キャンパスの懇談会の議事録がGoogleで出てきたので、読んでみたら、2008年頃だったと思いますけど、やっぱり同じ議論しているんです。分散キャンパスが融合していくためには、地域貢献というカードを切らなきゃいけないという議論がされているんです。私もその通りだと思います。そうすると、この壮大なビジョンを実現するためには、今ここにいらっしゃる学内の委員の皆さん、学部長の皆さんに言いたいのは、俺は関係ないって絶対に言わないで、山形大学の将来を賭けたプロジェクトだということで、四の五の言わずに応援してほしい。キャンパスはこうだからということは厳禁にしてください。そのぐらい大きな話なんです。皆さんの参画と3年間で実現できそうな、やった結果みんなが喜ぶような目標を設定して動き出していきたい。（里村委員）

○中間評価に臨むにあたっては、この学長選考会議が、当時は学長選考会議と言っておりましたけれども、玉手学長を学長として選考したということが、大変重要な基本です。当時玉手学長の選考のプロセスは、候補者が複数いたので、絞り込むところで最後までいろいろと難しさがありました。そこで一番心配されたのが、学長に就任した後で全学的な一体的推進体制が大丈夫なのかどうか、少なくとも分断されないように学内統一を図るということはこの学長選考会議から申し入れをしております。そこでお伺いしたいのは、そのことを克服しながらいろいろと進めてこられたと思うが、それでもやっぱりこういう部分が難しかったとか、これはまだまだチャレンジしなきゃいけないことだということがあるのかどうか。もう一つは、今日いろいろと質問の中で出てきたことは、結局山形大学全学一体になってとは言うけれども、法人の形態と先ほどの部局・キャンパスとの問題などがあって、一律に何かをやるということがそう簡単ではない。それを具体的にいろいろと今体験されているというところだと思います。この2点についてお答え願います。（相澤委員）

（2）監事の所見

相澤議長から、参考資料1「学長の業務執行状況の中間評価に係る実施計画」（令和4年10月19日学長選考・監察会議決定）に基づき、学長の業務執行状況に関し監事の所見の確認を行う旨説明があった。

次いで、渡辺監事から、資料2に基づき、学長の業務執行状況に関する監事の所見について要点の説明があった。

(3) 委員間の意見交換

相澤議長から、学長ヒアリング及び監事の所見を踏まえて、委員間で意見交換を行うべき事項があれば発言願いたい旨依頼があったが、委員から特段の意見はなかった。

最後に、相澤議長から、参考資料1「学長の業務執行状況の中間評価に係る実施計画」（令和4年10月19日学長選考・監察会議決定）に基づき、まずは各委員から12月12日（月）までに事務局宛に「評価結果等記入シート」を提出願いたい等、中間評価書のとりまとめに至るまでの今後のスケジュールについて確認が行われた。